

2024年11月3日（日）「第六のラッパ ～騎兵隊による審き～」

ヨハネの黙示録 9:12-21

12 第一の災いが過ぎ去った。見よ、この後、さらに二つの災いがやって来る。

13 第六の天使がラッパを吹いた。すると、神の前にある金の祭壇の四本の角から一つの声が聞こえた。14 その声は、ラッパを持っている第六の天使に向かいこう言った。「大河ユーフラテスのほとりにつながれている四人の天使を解き放ちなさい。」15 すると四人の天使は、人間の三分の一を殺すために解き放たれた。彼らはその年、その月、その日、その時間のために備え置かれていたのである。

16 騎兵の数は二億、私はその数を聞いた。17 私は幻の中で馬とそれに乗っている者たちを見たが、その様子はこうであった。彼らは、火の赤、青玉の青、硫黄の黄色の胸当てを着けており、馬の頭は獅子の頭のように、口からは火と煙と硫黄を吐いていた。18 その口から吐く火と煙と硫黄、この三つの災いで人間の三分の一が殺された。19 馬の力はその口と尾にあって、尾は蛇に似て頭があり、この頭で害を加えるのである。

20 これらの災いに遭っても殺されずに生き残った人々は、自分の手で造ったものについて悔い改めず、なおも、悪霊や、金、銀、銅、石、木で造った、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝むことをやめなかった。21 また彼らは、自分たちの犯した殺人やまじない、淫行や盗みについても、悔い改めようとしなかった。

【序論】

聖書の中には「天使」にまつわる描写が数多くあります。旧約にも新約にも天使は登場しますが、彼らが行なっていることの多くは「神の御告げを知らせること」「災いをもたらすこと」であって、一般的に言われる「天使のような人」という「美しそうなイメージ」とはかなりかけ離れています。天使と遭遇した人はほとんどが恐れ慄いていることが分かる。彼らは、神に命じられれば人を殺すことも厭わず、その実行力には容赦がありません。黙示録にはとりわけ多くの天使が出てきますが、中には神に属する存在なのかどうか分からないものさえいます。今日の箇所にも、ラッパを吹く第六の天使、川のほとりでつながれていた四人の天使、その手下と思われる無数の「騎兵隊」が登場します。騎兵隊の姿は見るも恐ろしく、およそ「神の使い」とは思えない様相を呈していますが、彼らは命じられるままに行動し、神に敵対する人々に致命的な害を加えます。問題は、読者に恐怖を抱かせるこのような記事は何を目的として聖書に書かれているのかということです。ここから福音をどう聞き取るか、どう解き明かすかが課題であります。

【本論】

第一の災いが過ぎ去った。見よ、この後、さらに二つの災いがやって来る。(9:12)

まず 12 節の扱いですが、これは 11 節までの内容と 13 節以下を結びつける「橋渡し」のような役割を果たしています。この宣言をしているのはおそらく、8:13 で「災いあれ」と繰り返し叫んでいた「一羽の鷲」でしょう。

本論 1. 四人の天使の解放 (13-15 節)

第六の天使がラッパを吹いた。すると、神の前にある金の祭壇の四本の角から一つの声が聞こえた。(9:13)

「祭壇の角」というのは、旧約聖書では「罪を犯した人がそれを掴むことによって憐れみを受けられる可能性のあるしるし」とされていました (I 列王 1:50-51、2:28)。新しく王になったソロモンに敵対したアドニヤやヨアブが命乞いをしたときに祭壇の角を掴んだことが記録されています。この「角」には、罪人の命運を決定づける権威が置かれているようです。ヨアブは角を掴んだにも拘らず有罪とされ命を絶たれました。今日の箇所では「金の祭壇の四本の角」から声が出たようですが、これは神からの指令であり、それによって多くの人間の運命が決定づけられることとなります。

その声は、ラッパを持っている第六の天使に向かいこう言った。「大河ユーフラテスのほとりにつながれている四人の天使を解き放ちなさい。」(9:14)

ユーフラテス川は西アジア最長の川で、ティグリス川と共にメソポタミアの地形を形作っています。創世記では、神がアブラハムに与えると約束された土地の東の境界がユーフラテスでした (創世 15:18)。ユーフラテスは、その川の向こう側にいた獰猛な民族の侵入を食い止める役割を果たしていたので、まるで「天使の守り」のような存在だったのでしょう。しかしここでは、その天使が解き放たれ、神に敵対する人々に容赦ない攻撃を加えます。ユーフラテスは一つの象徴だと思われませんが、神が定めの時まで災いをもたらす天使を止めておられたということの意味するのでしょうか。

すると四人の天使は、人間の三分の一を殺すために解き放たれた。彼らはその年、その月、その日、その時間のために備え置かれていたのである。(9:15)

この「四人の天使」は、その手下との関係から見て、闇の勢力の上層部のようにも見受けられます。光であれ闇であれ、神はご自身の目的のために用いられる。四人であるということは、地の四方へ散っていくイメージ、つまり全世界へ向けて審きが始まったということです。先のバツタによる災いは、人間の命までは奪わないように制限がかけられていましたが、ここでは「殺すため」と明確に目的が語られています。つまり、地への災いの度合いが一段高まったということです。そして、その犠牲になる数は全人口の「三分の一」。これも大まかな数字と思われませんが、現在の世界人口にしてみたら 26 億人という大変な数になります。しかし、それでも審きはまだ部分的です。

本論 2. 騎兵隊による災い (16-19 節)

騎兵の数は二億、私はその数を聞いた。(9:16)

「二億」という具体的な数字が出てきましたが、これは聖書の中で過去に一度も聞いたことのない数の大軍です。一人の天使につき 5000 万の兵を従えていたということになります。

私は幻の中で馬とそれに乗っている者たちを見たが、その様子はこうであった。彼らは、火の赤、青玉の青、硫黄の黄色の胸当てを着けており、馬の頭は獅子の頭のように、口からは火と煙と硫黄を吐いていた。その口から吐く火と煙と硫黄、この三つの災いで人間の三分の一が殺された。馬の力はその口と尾にあって、尾は蛇に似て頭があり、この頭で害を加えるのである。(9:17-19)

ここでは騎兵の姿が具体的に描かれています。馬を御している兵隊がいるようですが、兵隊よりも馬の特長の方が詳しく述べられています。「赤」「青」「黄」という三つの色は、「火」「煙」「硫黄」に対応しているようです。火をもって罰する者のイメージであり、何らかの意味において降りかかる火炎によって多くの人が命を落とす様子を描いているのでしょう。さながらソドムとゴモラの町が焼き尽くされた光景が思い出されます(創世 19 章)。実際にこれから起こりうることとしては、火山の噴火、小隕石の衝突、ミサイルの雨などが想像できますが、それとも違うかもしれません。馬の姿は通常の馬ではなく、「獅子の頭」「蛇の尾」を持ち、毒をもって噛みつく獰猛さを具えています。この無数の騎兵は、先のバツタによる災いと似ていますが、更に強い力を持っているようです(バツタは苦しめるだけだった)。

本論 3. 悔い改めない人々 (20-21 節)

この大きな災いが地を襲うとき、辛うじて生き残る人々もいます。20 節以下にはそれらの人々がどう反応したかが印象的に記されています。

これらの災いに遭っても殺されずに生き残った人々は、自分の手で造ったものについて悔い改めず、なおも、悪霊や、金、銀、銅、石、木で造った、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝むことをやめなかった。また彼らは、自分たちの犯した殺人やまじない、淫行や盗みについても、悔い改めようとしなかった。(9:20-21)

この災いは、神に敵対する人々に対して下される審きであります。それでも人類が滅ぼし尽くされないと見ると、尚も神の憐れみ、悔い改めの猶予が与えられていることが分かります。この箇所でも二度も「悔い改めず」「悔い改めようとしなかった」と言われているということは、残された三分の二の人々には災いの意味を悟って神に立ち返るチャンスが残されていると断言できるでしょう。しかし、この終末的な審きに直面しても、彼らは神の御旨を悟ることができないのです。そして、従来の生き方を変えることなく、偶像礼拝と罪に身を置き続けている。「なおも、悪霊や、金、銀、銅、石、木で造った、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝むことをやめなかった」「殺人やまじない、淫行や盗み」と、彼らが拝んでいたものや行っていた悪事が列挙されています。十戒において禁じられていることがことごとく挙げられており、人類の大多数がまことの神様の御心を知ることなく歴史を形成してきたことが、歴史の最終段階で明らかにされるのです。

【結論】

黙示録に描かれている審きは象徴的なものが多く、それらがどういう意味で成就するのかは分かりません。「獅子の頭」「蛇の尾」というのは、審きの恐ろしさを印象づける表現にも見えます。いずれにせよ、読者が悟らなくてはならないのは、神の審きが始まったとき、それが何に対する審きであるかを考え、自分は大丈夫であるか、神の御旨に従う生き方をしているかどうかを吟味しなくてはならないということです。知らないうちに偶像礼拝者となって生きていたということはないか、悪魔と手をつないだ人生を歩んではいないか、いつの間にか闇の側に着いていたということはないか。今聖書を読めることは幸いなのであって、神からの警告に耳を傾け、自分の生き方を吟味し改めるチャンスが与えられているということです。今一度、自分の生活を隅々まで掃除してみませんか。私たちの生活の細部に至るまで「神のもの」とすることができるように、光に属さないものを一つひとつ排除し続けたいと思います。

【祈り】

光なる神様。この世は闇に属するものがそこかしこに転がっており、私たちの生活に密着しているものも多く存在します。私たちの思考も、いつしかそれらによって支配されているかもしれません。私たちが語ること、行なうことが、神の国に属しているかどうか、注意深く見極める目をお与えください。光なるキリストと共に歩み、罪と偶像礼拝とは潔く手を切ることができるよう、聖霊によってお助けください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
唯一の主にして、全き光の内にまし給う、父なる神の愛、
終末的審きに先立ち、御言葉により人の心に問いかけ給う、主イエス・キリストの恵み、
光に属さぬものと手を切る勇気と力で満たし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。